



TITLE:

米國労働者家計三十年間

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 米國労働者家計三十年間. 經濟論叢 1920, 10(3): 445-449

ISSUE DATE:

1920-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127631>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三號 第十卷

大正九年三月一日發行

論說

消費税に於ける累進課税……………法學博士 神戸 正雄

社會の存續……………文學士 高田 保馬

鎌倉時代の家族制度(二)……………文學博士 三浦 周行

明治の米價調節(五)……………法學士 本庄 榮治郎

所得税均等負擔の理想と實現(一)……………法學士 汐見 三郎

キヤナンの富の概念に就きて(二完)……………法學士 石川 興二

時事問題

家賃騰貴と都市計畫……………法學博士 戸田 海市

官吏の待遇を論ず……………法學博士 小川 郷太郎

國庫制度の改定に就きて……………法學士 大森 研造

雜錄

交通機關論の交通論における地位……………法學士 小島 昌太郎

米國勞働者家計三十年間……………法學博士 河田 嗣郎

岡山藩の開墾策(二完)……………黑 正 巖

米國勞働者家計三十年間

河田 嗣 郎

左掲は昨年十二月三日發行のアウトLOOK誌に載せられたもので、米國マサチュセツツの一小鐵道の車掌が、既往三十年間に於ける其の生活費の膨脹の有様を示して投書したのである。同國に於ける勞働者家計の一斑を窺ふには大變面白い材料だから、其の大様を譯載することとした。

私の家では一八八九年以來誰でも品物を買つた者は一々其の品名と價格とを計算板に書き上げて置く習慣にして居る。そして一週間毎に私がそれを家計簿に帳上げをするのが例である。此の方法によつて私は夫婦と子供三人の一家を維持するに何程の費用が掛つたかを精確に知ることが出來た。計算の期間は一八八九年より一九一九年迄三十ケ年間で私は之を便宜の爲め十年毎三期に區別する。私はニュー・イングランドの一州に住ぶ者だから、私の家計が一般的に米國の何れの地方に對しても標準となることは考へぬけれども、私の家計としては、それは十分精細なものである。

私がマサチュセツツの一小都市の小供だつた時分の事を顧みて今と比較してみれば、諸式の騰貴は驚くに堪えたものである。其の時分の必需品に對する平均費用は、先づ今時の三分一を出でない。それは勿論其間に勞銀も増したけれども、生計費の膨脹に比較すれば常に一步づ、後れて來た。

私は一八八九年に結婚したのだが、私の妻は幸にも私と生活の重荷を共同に荷つて呉れて、終始私と苦樂を共にして呉れた。結婚當時から私はマサチュセツツの一小鐵道に奉職して居るので、其の當時私の勞銀は一日一弗七十五仙だつた。そして私の家計簿を繰つて見ると、當時諸式はバター一封度三十五仙、豚脂一封度十仙、牛乳一クオート五仙、砂糖一封度七仙で、麥粉一バレル七弗、馬齡薯一ブツシエル八十仙、そして石炭は一噸六弗だつた。

私共の最初の子供は一八九二年に生れ、次は一八九七年に次は一八九九年に生れた。最後の小供の生れた頃には諸物價は結婚當時よりも却

つて安値であつた。前に掲げた品物に就いて見ても、バターは一封度二十五仙乃至三十四仙、豚脂一封度八仙乃至十仙、牛乳一クオート五仙乃至六仙、砂糖は一封度五仙に過ぎなかつた。そして麥粉は一バレル四弗五十仙又は五弗に下り、馬齡薯は七十五仙乃至一弗の間を上下して居た。石炭は一噸六弗七十五仙だつた。

私の子供の生れたに就いて私の愉快な思出は教育のことである。私自身は私の父の生れた前年たる一八一五年に造られた古いみすばらしい小學校に通つて、先生も課業もそれは舊式なものだつたが、此點に於ては私の子供は大變仕合せな時節に生れ合せたもので、爾來教育の改善と進歩は夥しいものである。

扱又立歸つて家計の事を述べるのだが、それはほんとに不愉快な問題だけれども、事實は致方がない。私が前に示したやうに、一八九九年頃には其の十年前よりも物價は安くなつてゐた。そして一九〇九年に至る頃までは、或種の品物は恐ろしく騰貴したけれども、それでも一

般にはそんなに驚くべき騰貴はなかつた。洵に既往三十年間に於ける物價の趨勢に於て最も著大なる變化を齎したのは最後の十年のことである。特に最近の四年間のことである。次に示す數字が明かに之を物語るであらう。表中の品物の單位は總て前に掲げた所による。又各種の品物に就いての二様の數字は其の最高價格と最低價格とである。

	バター	ラード	ミルク	砂糖	麥粉	馬鈴薯	石炭
一八八九	・四一・六	・二〇・〇元	・三二・〇五	・〇九・七五	・五〇・一六五	・八〇・一〇	六・〇〇
一八九九	・四一・五五	・二〇・〇八	・〇九・五五	・〇五・〇五	・五〇・一四・五〇	一・〇〇・一・五	六・七五
一九〇九	・四一・六	・二六・一三	・〇九・六	・〇六・一五	・五〇・一六・五	一・一〇・一・五	五・五〇
一九一九	・八〇・一六	・三三・三三	・一四・一五	・二一・一〇	・五〇・一五・〇〇	・五〇・一・〇〇	二・五五

鶏卵は三十年間に於て他の品物よりも大いなる變動をした。即ち一八九七年には其の最高及び最低價格は一ダースに就き三十六仙と十五仙であつたものが、一九一九年には最高一弗二十仙最低四十仙となつてしまつた。砂糖の如きも其の最低價一封度四仙で、此價格は一八九四年と一八九五年と通じて動かなかつたのだが、一

九一九年には實に前表に示すが如き高値を唱ふるに至つた。

肉類の如きも私は過去三十年間に確かに四十割の騰貴を爲したゞらうと思つて居る。職人の褌衣や上張やの如きも三十割は騰貴した。

統計といふものは印刷せられた所を見ると頗る無味乾燥なものだが、然し時によると如何なる他の説明よりも雄辯である。左掲は生活に必

要なる諸費用の各十年期に於ける年平均額である。家政の任に當る人には多少の興味を惹くであらう。

	最初の十年	次の十年	第三の十年
バター	一・七・〇	二・四・〇	三・五・〇
メーカ	七・〇	一三・四〇	二二・五
キャンデー	六・〇	七・五	一四・〇〇
教會費	九・〇	三・〇〇	五・〇〇

咖啡及茶	六・五五	一〇・五五	一〇・八〇
果實	三・〇〇	三・一五	三・四〇
魚類	八・五五	一六・〇〇	三・二五
藥料	一・五五	一六・五五	五・八五
ラード	四・五五	一〇・五五	一四・六五
肉類	二〇・八〇	四三・五五	四九・五〇
牛乳	七・六五	四一・七五	四〇・〇〇
新聞雜誌	七・九〇	一四・九〇	一八・四五
砂糖	三・五〇	一〇・六〇	二七・五五
野菜類 (自家園產出ノモノヲ含マズ)	二・一〇	七・七〇	四三・九五
洗濯料	一六・六五	二・五五	一八・九〇
石鹼	三・五五	六・〇〇	八・二五
麥粉	二・五五	一三・五五	三・五五
燃料	五・八五	四三・五五	五五・八〇
鶏卵	一〇・八五	二・五五	三〇・一五
地代家賃	一〇・七五	一九・〇〇	二六・〇〇

私の家では前申す通り、家人各自其の費用を計算札に書附けて、其の統計を示す方法を取ることによつて、經濟上の競争を敏活にする道が講ぜられて來た。そして事實の示す所によると私自身の費用が他の家人の費用よりも大であつた。即ち衣服と、靴と、醫藥と其他の雜費との爲めに既往二十五年間に私は千三百二十四弗二仙を費した。そして妻は千二百七十二弗十八仙を、最年長の小供は六百二十二弗四十仙

を、次の兒は其の全生涯に涉つて六百四十七弗四十仙を、第三の兒は十五年間に二百五十五弗九十四仙を遣つたのである。

大抵の家では地代家賃が最も大なる費目である。三十年間の私の地代及家賃支出總計は五千百七十六弗四十仙で、之は一八九九年に私が今の地所家屋を買ふ迄に拂はれた實際の支出額千二百七十四弗四十仙と、其の以後の見積家賃三千九百二弗とを合計したものである。今の地所家宅は代價千九百五十五弗だつたが、之に私は千百九十一弗に上る修繕を加へた。そして私は可也大工仕事が上手だから大抵の修繕は私自身でした。そして其の私自身の仕事に對しては少しも日傭を計算して居ないのである。地所家宅を買ふ折私は内五百弗は遺産中より之を拂ひ他は私の儲けの貯の中から之を拂つた。其折私は貯蓄の全部を吐出したのだが、それでも今は私は貯蓄銀行に約八百弗の預金と自由公債八百弗とを持て居る。又其間生命保險料千三百弗ばかりを拂込むだ。

物價騰貴の勢と私の遅々として上る所得増加との間の競走は實に痛切なるものだつた。實に一時の油斷も出来ないほど餘裕を剩さなかつたのである。私は一生涯鐵道従業員で一八八九年に日給一弗七十五仙で始め、今は一日五弗五十仙を得て居る。私の鐵道は田舎の小會社だもんだから、私の勞働時間は十時間で他の鐵道のやうに八時間制ではなく、日給も亦他の大鐵道の勞銀よりも低いのである。私の勞銀のカーヴをお目にかくれば次のやうである。

一八八九	一日	一・七五
一八九二	同	二・三〇
一八九五	同	二・五〇
一八九九	同	二・七五
一九〇二	同	三・〇〇
一九〇七	同	三・二五
一九一〇	同	三・七五
一九一六	同	四・〇〇
一九一八	同	五・〇〇
一九一九	同	五・五〇

私の妻も私も、既往三十年を顧みて、何も遺憾に思ふ所はない。子供等も今や皆成長して長女はある大工業會社に勤めて居り、次女はワシ

ントン中央政府の書記をして居る。私共は決して十二分のもので得なかつたが、然し十分に之を得た。私共の爲した事は他の人も爲し得る。現今吾等が隨所に之を見る困却と不満とは、現今吾等の文明が誇張されたる諸標準の上に築かれたることを意味するものであり得ないだらうか。吾等の多數が今少しく簡易なる生活を爲すべきやう強ゐらるゝとも、それは恐らく何等の傷害をも齎さぬであらう。

數字の取扱方は固より學術的でないけれども、參考に供するに足りないことはない。又最後に附加へられたる感想は、永年の田舎生活の安往的な氣分を漂はして居るけれども、そんなに考へるのも又一つの考へ方たるを失はぬ。満足の出來る人は幸福である。